

## ヘルダーの“Humanitätsbriefe”

(一つの Skizze)

前田利道

( 1 )

1792年4月20日、フランスの革命議会は、革命に干渉しようとするオーストリア君主に宣戦を布告、フランス革命はまさに決定的段階にさしかかっていた。続いてプロイセンも参戦、Herder, Goethe の君主たる Weimar 公 Karl August もプロイセン軍に従軍したのであった。

この時機における Herder と Goethe との態度は興味ぶかいものがある。

Goethe は 8 月 Frankfurt を経て、Weimar 公の陣営に赴いた。かれはこの反革命の陣中であつて、Valmy の会戦を経験したのである。そして、優秀な装備を有する王公の軍隊が革命軍のために一敗地にまみれる有様をみた。

“今日のこの一戦で世界歴史は新時代に移った。”というかれの一言は、洞察に満ちたものとして後世に高く評価されている。しかも Goethe は、この陣中であつてさえ、光学や地質学の研究に余念がなかつたといわれている。かれの歴史的識見は、たしかに当時の多くの知識人よりもはるかに高かつた。

しかし、かれがどれだけ心からの感激をもって革命の現実に接していたか、その態度にはさまざまな研究の余地を残している。

これにたいして、Herder の態度はどうだつたらうか。ちょうどその同じ時期に、かれは病氣療養のために国境に近い Aachen にいた。そして身近に革命のいぶきにふれ、革命のうごきに鋭い眼光をあげつつ、心からの感動にうごかされていたのである。その時期にかれが書きたいいわゆる“Humanitätsbriefe”の中の多くの章が、かれの感動を証拠だてている。

Herder の “Humanitätsbriefe” は、哲学、宗教、歴史、各国の国民文学、等々に関するかれの広範な研究の帰結として、世界の発展に関して当代の何人にも追従をゆるさぬ洞察を示す書として燦然たる光をはなっている。

## ( 2 )

それよりも先に、Herder は、かれの主著の一つである “Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit” に筆をすすめていた。それは第4部まで完成、発表されていたのである。1784年に刊行された第1部を最初として、第2部1785年、第3部1787年、第4部1791年に、おのおの発表されたのであるが、第4部を書きあげたのは、フランス革命勃発の前年にあたる1788年のことであつた。

“われわれの地球は群星中の一つの星である。”という第1部、第1章の標題をみてもわかるように、Herder は、その歴史哲学に於いて、まず自然の発展から出発するのである。もちろん Herder がこの書で意図している根本目標は、われわれ人間の進むべき道、人間社会の発展の方向を、歴史的に見きわめようとするところにある。しかし、かれによれば、人間も人間社会も、その外的環境の所産なのであるから、まず、地球とその生成から論述を始めるのである。そして、第1部において、さらにすすんで、地球の上で次第に発展する自然の組織が歴史的に研究される。それは、植物—動物—動物的組織の頂点としての人間—の順序に発展してゆく。第2部においては、人類学と人類前史が取扱われるのであるが、第1部、第2部は、自然のなりゆきとして、多くの理論的論述を含むことになった。これに反して、第3部はローマ帝国崩壊までの、第4部はほぼ1500年までの人類史の敘述となつている。

Herder は、自然および人間社会の発展の原動力として、建設的な力と破壊的な力との交互作用を、それら発展の根元において考察している。すなわちかれはそれらが一つの因果関係をもつて発展してきたことを認めているのである。

しかし、同時に、Herder は、かれのいわゆる Humanität の理想的状態に

まで発展すべきものという目標を人間社会に与えるのである。従つて、“Ideen”全巻の追究するところは、究極のところ、人間の探究なのであり、人間が益々近づいてゆく Humanität の状態の追究なのである。

Herder は、“Ideen”第5部において、ルネサンスからかれの時代、18世紀までの歴史を書いて、それを完成させることを期していた。第5部において考察の対象とした Herder に身近かな歴史と、その眼前に現象しつつある出来事とが、かれのいわゆる Humanität の理想的状態に照らし出されたとき、いかなる様相を呈することになったかは想像に難くない。かれは当然それに批判的な目を向けた。現存する秩序を改造すべきだと考えた。しかるに、かれの理想とする社会秩序への道は、当時の条件から因果的に説明することはできなかつた。

ドイツ古典主義一般においてもそうだが、Herder は、ギリシアが Humanität の本来の発生地だと考えていた。だからといって、他の諸国民やドイツ民族の過去を過小評価していやしむという過誤にはおちいらなかつた。かれは、すべての民族的性格の独自性をその歴史から理解し評価することに先鞭をつけた。自らを啓蒙されたものと自認していた同時代の人々は、中世を暗黒で憎むべき時代とみなしたが、Herder はこれを社会発展の必然的段階と考えた。そしてそこに将来の国民文化の萌芽を見出したのであつた。

すでに1760年代に、かれは Humanität の拡大に役立つ一書を著わそうと考えていた。この考えは、その後もつねにかれの関心事であつた。そしてかれの Humanität 説は、現在の社会事情と密接に結合して論ぜらるべきものであつた。

Herder の友 Georg Müller は、1780年10月13日のことを記録して、次のように言っている。“われわれは、現在人類が至るところで呻吟している抑圧について語つた。すなわち、無神論、専制政治、良心と精神との屈従について、それから、至るところで、抗弁されることもなく、神聖な人権が無視されふみにじられていることについて。……啓蒙されたプロイセンにおいても、最大の奴隷状態が支配している……” 後日又曰く。“かれ (Herder) は貴族にお

そるべき敵意をいただいている。貴族は人間の平等とキリスト教のすべての原則とに反し、人間的愚昧の記念碑だからだ。”

Herder にとっては、政治的手段を顧慮しなければ Humanität への道は発見され得なかった。かれにとって政治的な歌はいとうべき歌ではなかった。もちろんかれは真の Humanität は、当時の事情から、容易に主張できるものではなく、それを拡大してゆくことなど、なおさら困難なことを知っていた。

“Ideen” 執筆中にも、仕事がなかなか捗らない、政府への顧慮が言うに言われぬ苦痛を与える、といっている。かれは偽を言いたくもないし、又言えもしない、それ故に横にそれてみたり、後をふりむいてみたりする、しかも政治は連綿として歴史をつらぬいて人間の権利を侵害していたのであった。

Herder は人間社会の次の段階への見通しについて困難を感じていたばかりでなく、現状を批判することにもあらゆる束縛を感じていたのだ。

フランス革命が勃発したのは、Herder が歴史の発展に関する徹底的な考察をめぐらして、ちょうど上述のような問題になやんでいるときであった。当時のドイツに於いて、フランス革命が誰よりも強く Herder をうごかし、かれが最後まで革命の味方として止ったことの秘密は、かれの歴史哲学が説明してくれる。かれは、そこに、人間社会が新段階に進むべき破壊と建設との力の相克をみたのである。

だが、革命の衝撃は、Herder の “Ideen” 第 5 部の進行には、かえって障害となった感がある。かれは歴史に筆をとることよりも、もつと直接にフランス革命と Humanität とについて呼びかけたい要求をもつたにちがいないからである。かれの “Humanitätsbriefe” はこのような要求から書きはじめられたのであった。

## ( 3 )

“Humanitätsbriefe” の書きはじめられた直接の最も強力な動因は上述の如くであるが、Herder は、かねてから、ドイツにおいても、思想的に又現実的に、解決すべき種々の問題を論ずる共通の場所を求める意図があった。かれは、

Benjamin Franklin の “Political, Miscellaneous and Philosophical Pieces (London, 1779)” の写しをもっていたが、その中に述べられている Franklin の計画のうち、Herder が最も重視したのは、哲学や博愛の問題を論議する協会、いわゆる “Philadelphia Junto” の計画であった。かれはこの計画にならって、Humanität の問題を、論述の形式でなく、闘論の形式で追求しようと思ったのである。これには又、主張と主張者との仮想的分散によって当時の厳しい検閲の目をのがれる意図も含まれていた。

さらにもう一つ、ドイツ民族の精神文化の結合点を見出そうとする von Baden 辺境伯らによる “Teutsche Akademie” の計画があつたが、これにも Herder は関心を示し、この計画についても種々考察をめぐらしていた。そのことも “Humanitätsbriefe” の形式、内容に影響を与えているものと思われる。

しかし、やはり、1792年のフランス革命の考察が、最初のほどは、Herder の思考の中心をなしていたことは明らかである。“Briefe” の第1集の最初の草稿は1792年に書かれた。そこでは、Herder が当代の人々に比べていかに公平に正確にこの大事件を評価し得たかの証拠がある。Herder は B. Franklin の考えにならって、友人間の文通という形式でフランス革命に関する種々の見方を客観的に提供しようとして企てた。しかし、激動する当時の情勢下に、封建的小諸侯の国ドイツはわきかえっており、当時において最も開化した君主に属する Karl August や Goethe やの支配する Weimar においても、Herder の公平さが、その論敵はもとより、味方からも反撥される素因を有していたことは明らかである。Brief 10. — Brief 18. はとくにドイツと関連して革命の歴史的な重要性を徹底的に論議する計画であつたのだが、終局的に発表された第1集は Brief 13. で終っており、フランス革命を取扱った全部分が除外されていた。

除外された部分のうち Brief 13. は二つの節を残すのみであり、Brief 14. はばらばらになり、Brief 15. は全然失われてしまっていて、全体として断片的であることはまぬがれぬが、それはやはり当代ドイツ人による革命評価の最も高い水準を示している。

草稿の Brief 10. において、Herder は、“Ideen” 第4部の思想を継続させ、ヨーロッパ文明の過去の残存物の概観を行い、一方に於いては儀式化した宗教と集積した迷信との、他方においては封建的な特権と専制政治との跡をたどっている。そしてこれにたいして、国家には一つの階級しか存在しない、すなわち人民 (Volk) だ、そして王も百姓もおのおのの定められた位置を占めてそれに属しているにすぎない、という思想を対置しているのである。

フランス革命にたいする Herder の一般的な態度はどうかといえ、かれはフランスが制限された王国となるか共和国になるかが判明するまで判断を見合わせるべきだと考えている。そして、かれの君主 Karl August の軍隊がヨーロッパ反革命連合軍と共に Valmy にあつた、その同じ時機に、かれは次のような意見を開陳しているのである。すなわち、——概してフランスとフランス文化の模倣とは過去に於いてドイツに害をもたらししたが、それが償われる時機が来ているのかもしれない。——もちろん、ドイツ人はけっしてフランス人たることはできない、この故にドイツ人は革命から学びうるところを学び、もちい得ないものをしりぞけることによって、まったく客観的に革命をとり扱わなければならない。——完全に新しい国家形態の発展というものは、注意深く考察さるべき一つの可能性たるものだ。——

検閲を顧慮して Herder が印刷に付さなかつた Brief 18. においては、フランス共和国にたいするヨーロッパ諸王国の干渉政策をすどく批判している。そして、共和国という国家形態は、与えられた情勢においては、フランスにとって唯一の正しい形態であると考えている。ただ、フランスのいわゆる恐怖政治時代の党派的闘争は、Herder の理解の外であつたことは止むを得なかつた。かれはそこに無意味な狂暴さしか見出せなかつたのだ。

“Briefe” におけるフランス革命の見方は、およそ以上のようなものであるが Herder が最初からもつていた意図は、さまざまな手紙の形で Humanität に関する論述をしようということであつた。従来絶えず研さんしてきた Humanität の問題であるから、“Briefe” のための Herder の準備研究は広範なものがあつた。この問題に関する他の人々の言葉なども長い間注意深く熱心に蒐集して

いたのであった。

かれの Humanität 説の根底にあるものは、人類は不断に発展完成の途上にあるという観念であり、ドイツ古典主義時代に特徴的な教育熱と道徳的楽天観がその背景をなしている。Herder にとっては、人間はその地理的、社会的な環境によって形づくられるものである。しかしこの環境は人間によって絶えず変化され、改善されうるものであるし、又そうしなければならないものである。それによって人間自身が向上発展するのである。

社会に身分とか階級とかがあるために Humanität の発達が阻害されるということも Herder は理解していた。しかしかれにとって、身分的自負は一種の妄想なのであった (Brief 46.)。しかし身分的特権の経済的・政治的影響も部分的には正しく判断している (Brief 57.)。

Herder は、封建的な桎梏をとほぐすことによって、真の国民意識を発展せしめることを論じたが (Brief 57.)、同時に盲目不当な国民的自負の敵であった。一国民が他より優つていると考えたり、他を抑圧したり、搾取したりすることはかれの Humanität 説と相容れない。かれは植民政策に断乎として反対する (Brief 57.)。祖国愛と他国民への友愛が Herder にあっては一致するのである。

Herder の Humanität 説はその核心においては進化論的である。しかしその偉大さは、かれがそれをユートピアをうちたてて頭のなかだけで解決する方法や、あるいは思弁的な方法やで追究せず、歴史哲学的に、結局は政治的に基礎づけようと試みた点にある。

( 4 )

Herder のフランス革命にたいする熱狂は、Weimar におけるかれの内面・外面の状態に微妙な作用をおよぼした。宮廷の人々が、宗教・文教上のこの責任者の“左傾”にたいしてころよく思わなかったのはいうまでもない。かれはまず“舌をつつしむ”ことをよぎなくされる。初稿“Briefe”の主としてフランス革命に関する部分は、発表できなくなってしまうし、その上とりかえすことのできない冷たい空気がかれの周囲につくりだされたのである。

それは Herder の不幸と孤独とを結果した。 まだしも “Ideen” は Weimar に於ける友人達をはじめ、周囲の共感と温い激励のうちに進行することができた。 しかしそれらの友情もいまは失われようとしていた。

加えて、一方には、1794年に、Goethe と Schiller との友情が結ばれ、いわゆる “幸福な出来事” が起り、以後 Schiller の死に至るまでの十年のみのり多い交友関係が生ずると、Herder は、かれみずからが根底をつちかつたドイツ古典文学の領域においても、もはや影響力を失うに至ったのである。

Herder の世界観全体が、現実政治の直接的な批判にまでかれを駆りたてたのにたいして、Goethe のそれは、同じく自然に根底をおく同質の世界観でありながら、あるいは、全体としての自然感情のなかに、あるいは、はるかに微細な個的自然のなかに埋没するかにみえ、人間社会の理想を求めては、はるかに遠くギリシアに想いをはせていた。

Herder にとっては、(イタリーからの手紙のなかで言っているように) Goethe の生活と態度とが “利己的に” 思われた一方、Goethe は Herder の傾向に危険を感じたのであった。 Goethe が 1804年 Riemer に言った言葉が、又しても洞察力の卓抜さを示していると同時に、Weimar 公の顧問官としての、かれの制約された立場をばくろしている。 “自然諸科学のみが実践的になり、これによって人類を裨益しうる。 哲学、文献学といった抽象的諸科学は、形而上学的であれば僧侶根性とか煩瑣哲学とかいう不合理へ通じ、歴史的であれば世界改造および国家改造という革命に通ずる。” と。

“Humanitätsbriefe” の封建制批判とフランス革命とに関する章句は骨抜きにされ、発表されなかったが、刊行された部分に於いて、Herder が Lessing をはじめ過去の啓蒙主義時代の思想家たちに帰っていったことには意味があつた。これは時流からすれば一つの逆行のようにみえた。しかし Herder はそこに当時の諸問題を解決すべき前提を見出そうと考えたのであった。

Herder の Kant 批判も同じ源泉から理解しなければならない。

Herder も Kant も Goethe も共に、ドイツ市民革命の前夜にあつて、その先駆的なイデオロクとしての位置を占めるものであることはまちがいない。

かれらはおのおのの立場にあつて、ドイツ啓蒙主義からのいつその発展段階を示している。しかし現実においてドイツ市民階級は革命的行動を行うまでに成熟していなかった。ここにドイツの市民革命がまずイデオロギーの上の革命として発展しなければならない宿命があつた。Kantの観念論哲学は、そのような時代が生んだ革命的イデオロギーの畸形なのであつたが、当時のドイツの実状に適合するものとしてドイツ哲学を支配するものとなつた。フランスに於いて現実の革命が進行するのに対応して、ドイツではイデオロギーの世界だけに革命が行われていつたのである。しかし、Herderの眼界はもっと広く、もっと深く行きわたつていた。かれは地球の生成から人間社会の発展までを観念としてではなく、現実的なものとして研究していた。18世にいたるまでの自然科学や社会科学の成果をわがものとしてこれに適用した。あらゆる民族の文学や思想を、それぞれ独自の価値をもつものとして、その歴史的発展を倦むことなく研さんしつくしていた。かれはドイツ的地盤をのりこえて、世界の歩みに参与していたのである。

Herderにあつては人間は自然の産物である。かれは自然の発展の段階のうゑに人間の発生をみるのである。人間的思考と人間理性も自然の産物なのであり、人間の外的な諸関係によつて決定づけられているのである。すなわち、ここに人間理性を観察の出発点とするKantの方法との決定的な相違がある。Kantにあつては人間の思考法則は外的経験とは独立に、人間に内在しているのであるが、Herderにあつては、それは運動発展する外的自然との接触によつて人間に生み出されたものであつた。ここにHerderの唯物論的所論の核心が見出され、しかもそれが機械的唯物論をはるかにのり越えたものであることを示している。

Herderの歴史啓学は、時代をはるかにとび越えて、一方においてはDarwinの進化論に接続し、他方においてはFeuerbach, Marxの唯物論に接続している。時代とのこのずれのために、かれの所論やKant批判は、時流の外におきわすれられ、かれの“憤激”は正当な理解を得られず、その貴重な諸理念のみのりは、なお後生を待たなければならなかつたのである。

## ( 5 )

初稿“Briefe”における Herder の政治的な思想は、フランス革命によって  
激発され、促進されたものとはいえ、それはかれの哲学、歴史観の当然の帰結  
であった。それまでは現実的な基盤に結びつき得ず、さらに、四圍の事情に  
はばまれて、まわりくどい思考と、用心深い表現とにかくれていたにすぎなか  
った。それは、たとえば、かれが“Ideen”で国家の問題を論ずる時、四度も  
稿を改めたという事実によっても知られる。

しかし、この関係は、外国の政策にたいする批判活動などに於いては、また変  
った観点を許す場合がある。市民階級が未発達であったドイツにおける先進  
的思想家たちは、同時代の先進諸国の市民的イデオロクよりもむしろとらわ  
れぬ自由をもっていた場合もあったのである。そして、かれらは、先進国の  
社会的現実をみぬいて批判することができた。

たとえば、この時代に、経済的に最も強力に発達していた英国に於いては、  
すでに資本主義的な植民地収奪が顕著になっていた。そして商業的利益のため  
の戦争が次々に行われていたのである。Herder をはじめとする 18 世紀末  
のドイツの humanistisch な思想家たちは、力をつくして封建的な抑圧や封建的  
収奪戦争を止めさせるためにたたかう一方、同時に資本主義的な新しい搾取形  
態を見破り批判することができた。ドイツに於いては未だ資本主義が国家  
検閲を支配していなかったから、英国の例にみるような盗賊的な商業資本にた  
いしては自由自在に批判することができたのである。この場合にはドイツ思  
想家は政治的社会的な分析を、先進諸国の思想家よりもいつそう明確な形で遂  
行した。そしてこのような場合に、かれらの観点がより正確にたしかめられ  
るのである。

## ( 6 )

まことに Herder こそは当時におけるドイツ国民の矛盾と可能性とを一身に  
具現していたおそるべき人物といえる。ここには“Humanitätsbriefe”を中  
心として、ざっとしたスケッチを試みたにすぎないが、かれの思想体系が正当

にドイツ史に組み入れられないかぎり、後者の理解は不十分なものになってしまふだろうことは明らかである。たとえば Herder の“Ideen”を無視して、あるいは軽視して、Hegel の歴史哲学を論ずることは、果して公平な処置だろうか。このスケッチでは特に弁証法については述べなかったが、Kant, Fichte, Hegel の線だけで弁証法の歴史をたどる従来のやり方は甚だ片手落というほかはない。ドイツ思想史におけるもう一つの太い線——唯物論的傾向の線のなかに Herder の体系を組み入れて、それにもつと正当な評価を与えなければならぬだろう。